

# 樋口一葉作

# 十三夜

朗読  
小河内仁美

「にごりえ」を書き上げ、困難な状況でも生きる道があってほしいと願う一葉が、その三か月後（亡くなる約一年前）に発表した「十三夜」。明治期を生きるひとりの女として、自分が何を書くのか、一人の作家として成長の証を残した作品のひとつです。

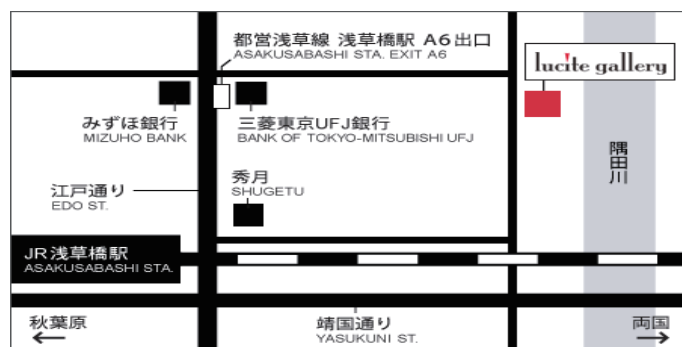
一葉の両親は、時は幕末安政、150冊の書物を持って費用をなし駆け落ち同様、山梨から江戸へのぼりまです。そして同郷人ネットワークを生かしながら、ともに苦勞し働か貯め、御家人の株を買い士族と成ります。一葉はそんな両親のもと4番目の子（次女）として明治5年5月2日（旧暦3月25日）、東京府庁官舎（現在の東京都千代田区内幸町）にて生を受けました。

明治10年3月小学校入学。16年12月に第4級を首席で修了するも、「女が学問を身につけるのは好ましくない」との母親の意により上級進学はなりません。不憫におもう父の計らいで中嶋歌子主宰の歌塾「萩の舎（や）」（現在の文京区春日）へ入門。ここで古典、書道、和歌等を学び、晩年には師範代を勤めるまでになります。毎週土曜の稽古日や月例会には華族上流階級の令嬢を乗せる黒塗りの人力車が門前に並ぶ中、一葉自身は「家は貧に身はつたなし」と記しました。新年歌会にと両親は、緞子の帯と古着の八丈の着物一揃いを用意したところ、令嬢らの召し物のようすを一葉から聞き、「このようなみすぼらしい着物では恥ずかしいからおよしなさい」と母が涙を浮かべ語ったエピソードをいま日記に読むことができます（明治20年2月19日付）。

● 日時 平成29年 12月 9日 (土)

開演 ◆ 16時 ◆ 18時30分

● 会場 ルーサイトギャラリー



ほうじ茶色の土壁が囲う懐かしい日本家屋です。

最寄り：浅草橋駅（JR 東口、都営浅草線 A6 出口）徒歩 5 分

台東区柳橋 1-28-8

<http://lucite-gallery.com>

各回ともに開演30分前より開場します。展示ギャラリーやベランダからの隅田川夕景もご覧ください。

● 木戸銭 1,000 円（前売券有り）